勝海舟の功績

渡米までの勝海舟

●10代の頃

剣術や座禅を寝る間も惜しんで行ったため、苦しい時も、少しの動揺もなく対処できる胆力が培われた。

●20歳の頃

オランダから江戸幕府に贈られた大砲に書かれた外国語の意味を知りたくなり、オランダ語を学びはじめた。

●25歳～28歳の頃

全58巻のオランダ語の辞書、「ドゥーフ・ハルマ」を一年間で二部書き写した。その後、佐久間象山という学者から外国の兵法（戦術）を学んだり、いろんなことに興味を持ち勉強した結果、自分の塾を開くことができた。

●38歳の頃

1860年、日本の海軍技術を試すため、軍艦・咸臨丸の船長として**サンフランシスコ**まで太平洋を横断した。かかった時間は**37日**！途中、体調不良になったが、なんとか横断に成功。サンフランシスコでは、近代的な町並みや進んだ産業に驚いた。そして、日本のように身分や家柄ではなく、選挙によって公平で民主的な政治が行われていることに感心した。

帰国後、神戸に海軍の訓練所を創り、新しい日本を担おうとする若者を、幕府の人間だけでなく全国から集めた。その中には、坂本龍馬もいた。

渡米後の勝海舟

◆帰国して数年後、熊本出身の政治家・横井小楠と出会う。その影響を受けて、政治を「幕府の都合で行う形」から「みんなのためにみんなで行う形」にするために頑張った。自分たちの利益や立場を第一に考えがちな幕府に対し、海舟は幕府の人間でありながらそうではなかった。そんな中、薩摩藩士の西郷隆盛などと出会い、人々に影響を与えていった。

◆当時、鎖国を続けるか開国するかで日本各地で激しい争いが起こっていた。争いが続けば、イギリスやフランスなどの介入を受け、日本は植民地になってしまうか、戦火に包まれ多くの犠牲者が出てしまうと考えた。海舟は日本の行く末に危機感を抱いた。

江戸総攻撃の前日、海舟は新政府軍の西郷と会談に臨み、**江戸総攻撃の中止**を強く訴えた。西郷は「ならば、江戸城をすぐにわたされるか」と条件を出し、海舟は「城は、おわたし申そう」と答え、江戸総攻撃は中止となった。海舟は西郷に「今は日本人同士が争っている場合ではない。西洋列強に対抗するには、諸藩が互いに話し合い、協力する必要がある」と伝えた。日本の未来を思う2人の信頼関係が、争いを防いだ。

◆江戸無血開城の後は、徳川家の汚名を取り下げてもらうために新政府と駆け引きした。その後徳川家は許され、海舟は新政府で働き始めた。政府の相談役として、明治維新後も日本を見守り、支え続けた。